

新な二期攻撃！「公団用地貸し付け」

三里塚芝山連合空港反対同盟は、3・30現地大集会を設定し、全国からの総結集を呼びかけている。この闘いは、十四年間にわたって不撓不屈に闘う三里塚闘争を破壊し、80年二期工事着工をせんものと、政府・空港公団が「農業振興策」という名をかたつた公団用地貸し付け攻撃をもつて闘いの中軸である反対同盟を懐柔し、分断、破壊せんとするあくらつな攻撃に対する一大反撃の場として闘われる。そしてなによりも二期工事紛争・空港実力廃港にむけた80年三里塚闘争の出発点として闘われるのである。

反対同盟破壊を狙った新たな攻撃

政府・空港公団は、昨年7月、森山前運輸相の「話しあい」路線をもって反対同盟のたかう団結を破壊し、もつて80年二期工事着工を策したのであった。しかしこれも反対同盟の9・16、10・21、12・16の現地大集会への決起と、わが動労千葉の10・21、11・1の二波にわたるストライキによって完膚なきまでに粉碎してきたのである。

3・30現地大集会へ結集しよう

これにち政府・支配者階級による体制的危機乗り切り等としての侵略と反動、軍事大国化攻撃の要をなすのが三里塚空港建設である。二期攻撃を至上命令とする政府・空港公団は、公団用地貸し付けなる新たな攻撃を開始してきた。この新たな攻撃は、昨年12月13日の地崎運輸相の「二期工事は計画通りできるだけ早く進めたいと思っている」との発言を皮切りに、それをうけて、1月17日大塚公団総裁は「今年には用地内買取と二期工事を進めるうえで条件整備が急務。反対派もふくむ空港周辺の農業振興策について今年の耕作期に間に合うように公団の用地を配分する」として、1月22日「公団用地貸し付け計画」を発表したのである。この計画たるや、朝日新聞1月22日付で「反対派農民懐柔の効果が期待される」と報道されている通り、二期工事強行のための敷地内の用地買取攻撃をつよめ、反対同盟の解体をねらった卑劣な攻撃なのだ。

これにち自衛隊のリムバック参加をもって海外派兵・軍事大国化・侵略体制づくりを狙う日帝にとって、三〇〇メートルを越す滑走路を備えた三里塚軍事空港の強行完成と「政府にたてつく」人民の闘いの岩を徹底的に叩きつぶし解体することとは、今、必須急要の課題になっているのである。日本労働者階級の最も重要な反戦課題として、二期工事紛争を闘いとらねばならない。そして、三里塚二期決戦の正念場をむかえた今日、「三里塚闘争は末期的崩壊の症状を呈した」と、政府・公団と同一の立場にたつて三里塚闘争破壊を策す、「本部」革マル反動分子の敵対をはねのけ、3・30現地大集会へ圧倒的結集をかちとろう。

3・30三里塚 大結集のために(その1)

敷地内切り崩し「農振策」を許すな 農振策を

「農振策」の名をもつて 農民から土地を奪う攻撃

そもそも、国策と称して空港建設のため農民から土地を強奪し、農業を破壊してきた政府・公団に「農業振興」を語る資格など全くない。ましてや、この公団用地貸し付け計画なる攻撃が、「地元」の要望にこたえた「農振策」ということ自体、盗っ人の論理である。地元の要望は、農地死守、空港粉碎こそが唯一無二の要望であり三里塚闘争を闘う農民の原点なのである。

すでに明らかな通り、この攻撃こそ、農民の闘いの原点であり生業の基盤である土地をエサにして反対同盟内部を懐柔し、団結を分断、解体して



軍事空港粉碎！ いざ、3・30総決起へ！

「三里塚闘争勝利と結合して、軍事大国化への道を断て！」

95名の隊列で横須賀市内デモに立つ動労千葉。

(2・24リムバック粉碎闘争)